

半植民国家とマルクス主義の選択

中屋敷

宏

一、問題の所在

本稿の課題は中国近代において中国ナショナリズム運動が、なぜマルクス主義を選択しなげなかつたか、という問題を説明することにある。この問題を説明する視座は、近代世界システムの中の中国に据えられねばならない。この問題は視野を中国に限定して、中国の内在的問題として説明しようとしても決して、真の歴史と思想のダイナミズムを明かにすることはできないからである。近代世界における中国は、近代世界からの被規定性の中にあり、自ら主体的に歴史を創造する能力を既に喪失している。西欧資本主義が作り出した近代世界と言われるものと中国との相互関係を視点をあてることによってのみ、われわれは近代中国の真の問題を認識しうるのである。

近代世界の中国に対する根源的規定性は、先進資本主義国の資本蓄積のための再生産構造の「必要」に基づいて、そのための「対象」として中国を世界システムの中に包摂したということにある。このことによって中国は自らが自らの決断によって、自らの歴史を生きる主体としての地位を喪失するのである。中国を動かす主要な要因は、先進資本主義国の必要であり、従って中国に対する「要求」であった。このことが中国にとっては、中国近代史を貫流する最も基本的な民族的課題を決定した。即ち民族と国家の独立、独立を達成するための富強の達成、これである。独立と富強こそは、民族の悲願として中国ナショナリズムの最高の課題となるのである。中国ナショナリズムはその担い

手は様々に変化する。清朝改革派から共産党まで、その担い手は階級的にも内容的にも大いに変化するが、しかし、そのどれもが最高の民族的課題を追求するという点では、まぎれもないナショナリズムの運動であつた。

この中国ナショナリズム運動は、目標は一貫して不動であるが、それを達成するための手段と方法については、数々の試行錯誤をくり返す。近代世界システムの中の中国支配の本質が認識し難く、従つてそれへの対抗方法が明確に意識できなかったからである。近代世界システムにおける支配は、これまでの軍事力と政治的支配を手段とする世界帝国のそれと違つて、本質的には経済的なものであり、これまでの支配にはない新しい形のものである。従つて中国民族はその支配を誤認して、それへの対抗方法において試行錯誤をくり返すことになるのである。

しかし、多くの犠牲をともなつた試行錯誤の末に、中国民族は帝国主義支配の本質についてゆるがぬ認識に到達する。この認識は晩年の孫文によつて示されているが、この認識が中国ナショナリズム運動の指導思想としてのマルクス主義の選択と結びつくのである。本稿は中国民族が数々の改革の実験によつて西欧近代の支配への認識を深めていく過程を分析しつつ、この認識の深まりがなぜマルクス主義の選択へと結びつかざるをえなかつたか、という問題を説明することにある。民族最高の悲願ですら反体制的とは言え、なお西欧近代思想の呪縛の中にあつたのであり、この事実の中に現代中国の悲劇を解く一つの鍵があるであらう。

二、西欧的近代化の追求

世界的な分業の体系として組織されている近代世界システムにおける「支配」は、それ以前の世界帝国における「支配」とは全く性質を異にする。世界帝国においては周辺部から中央への富の流れは、強制力——貢租と租税——と交易の独占によつて確保され、この経済的支配のためには帝国と軍事力、官僚組織という上部構造が必要とされた

が、近代世界システムにおいては、経済的支配はそのために必要な政治的・上部構造に要する費用という「無駄」を省いた、全く経済的なものとして組織されているという所にその特質がある¹⁾。ウォーラー・ステインは、このことを「このようなあまりにもやっかいな政治的・上部構造による「無駄」を排して、社会の下層から上層へ、周辺から中央へ、多数から少数者へとむかう経済的余剰の流れをますます増やせるような技術は、近代世界がなしとげた社会的発明のひとつなのである²⁾」と言う。世界経済として組織された近代世界システムは、経済的余剰の搾取手段としては、このような意味において、これまでになく効率的な方法をもたらしたのである³⁾。

近代世界システムにおける「支配」は、経済的に効率的であるのみならず、一見すると非常に「平和的」ですらある。貢租や租税による経済的収奪には、むき出しの権力がつきまとうことは不可避であり、支配の暴力的性格は万人の眼に明かであったのであるが、近代世界システムにあつては、日常性としてあるのは商品の生産と売買という純粹に経済的行為である。勿論、「支配」の本質的層性として暴力は、このシステムの根底に貫流しており、決定的瞬間にはいつも表面に躍り出てくるのであるが、しかし、ここにおいてはそれは出来る限り表面に出ることを避ける。あくまでも正面に立つのは経済行為であり、このシステムは経済的性質のものとして存在する。

支配力が直接的には経済的支配としてあり、政治的、軍事的支配は後景に退くという近代世界システムにおける支配の性格が、被支配国に一つの「幻想」を生み出す理由となる。中国は特に半植民地国家として一国の直接統治の下にはなかつたという事情が、この幻想を倍加する。即ち西欧に匹敵する兵器と商品、利器を製造できれば、西欧に対し、独立を達成できるといふ幻想である。工業技術と工業生産力こそがそのポイントである。従つて工業建設を行わさずば、中国は必ず独立富強を達成することができる。このような信念こそは、その幻想の産物である。中国において起つた最初の自覚的ナショナルリズム運動である「洋務運動」とは、まさにこのような信念の上に成立したも

のであった。この当時は二度にわたるアヘン戦争には敗北したとは言え、中華文明に対する自信と誇りはまだゆらいでいなかった。この運動は西欧文明を蔑視しつつ、その吸収を主張するという一種奇妙な運動としてある。

「洋務運動」における西欧文明観を最も典型的に示しているのは、鄭観応の「盛世危言」の昌頭の一文「道器」である。この文章で鄭観応は西欧文明は、「大学」の亡失した一伝「格致」がヨーロッパに入り、発展したものであるとする。そして次のように言う。「我はその本に専心し、彼はその未を追求したのであり、我はその精髓を明かにし、彼はその粗を手にしたのであり、我は事物の理を窮め、彼は万物の質を究明したのである」。しかし、この「器」の文明は「すべて覇道に属する残滓のみ」なのである。王韜も西欧の汽船や自動車、機械の便利さを認めつつも、「これはすべて器であり、道ではない。治国平天下の本と云うことはできない」と言う。このように劣った文明ではあるが、彼等は共通してその摂取の緊急性を主張する。そうしなければ、世界の動きから中国が立遅れ、ヨーロッパに対抗できないからである。この危機意識は薛福成の「華夷陥絶の天下は一変して中外連関の天下となった」から「堯舜がこの事態に当たったとしても、結局のところ、門を閉ざして独り治めていくことはできない」という言葉がよく示している。この危機意識が西欧文明の摂取を彼等に主張させるのであるが、それは次のような論理である。

今日、天下の事を語ろうと思えば、必ず欧州から始めねばならない。諸州の諸大国には富強の綱領があり、物を製造する秘訣を持っている。これをおいては、相手の長所に学んで自ら変化する道はない。

だが次の問題は欧州の「器」の文明を摂取して中国は富強を達成することができるのかという事であるが、それに対しては洋務派の人々はかなり楽観的である。馮桂芬はこの楽観的見通しを次のように言う。「始めは師事してならぬ。次には並んで一緒に歩き、最後には凌駕して上に立つ。富強の道は、実にここにある」。この種の楽観主義は思想家達の間にあっただけではない。現実の洋務運動が、この種の楽観的展望の下に推進されていたのである。鈴木智

夫氏が検討している、招商局の設置や機械製綿紡業の設置を主張した「申報」の社説に、それを見ることができると。社説は招商局の設置とその将来的展望について、次のように述べている。

われわれの判断では、招商局の将来は大変有望である。招商局の船舶は賃金の低い中国人の乗組員を用いるので、経費が節減でき、運賃もその分だけ安くできる、と考えられるからである。招商局の船舶は必ずや外国船を圧倒し、数年後にはそれらを窮地に追いこんでいくであろう。¹⁰

また洋式綿布の製造についても、社説は次のように述べている。

中国が自国で洋式綿布を生産するには、紡織機の購入と紡織技師の雇傭の両面でイギリスより余分に費用がかかるが、中国にはこれによる不利を補って余りある利点がある。それ故、中国が機械製綿紡業を経営することの利益は必ず大きい。¹¹

このような楽観論にもかかわらず、現実の洋務運動は、西欧を凌駕するという目標を達成することはできない。中国に近代工業の基礎を建設した等の成果があったことは無視しえないが、しかし、目標との関係で言えば、それは失敗に終わったのである。この失敗の原因については、清朝官僚層の無智と無能、そして腐敗した体質などの原因がこれまで指摘されてきた。そしてそれらはそれなりの正しさは持っているが、しかし、最も根本的な原因としては、やはり洋務運動の基底にあるその文明観をあげねばならないであろう。洋務派の人々は、その中華意識から西欧文明を「器」の文明として蔑視したが、それ故に「器」そのものを全く理解していなかったのである。彼等は武器や機械を購入し、中国がそれを備えさえすれば欧米と対抗できるようになると考えていた。「器」とはその程度のものでしかない、とするのが中華意識からする「器」の文明の評価であった。曾国藩は「将来は夷智に学んで大砲、船舶を製造して、特に永遠の利を図るべきである」と言ったが、この「永遠の利」という言葉ほど洋務派の人々の

心情を適切に表現している言葉はない。一度機械を購入して設置しさえすれば、それで十分なはずであった。このような「器」に対する無理解と評少評価が、洋務運動の躓きの石となっているのである。例えば鈴木氏が分析している上海機器織布局は、その典型的な例である。¹³ここでは中国棉花を原料として薄地綿布を製造し、外国綿布の主力となつている薄地綿布（細糸）に対抗するはずであったが、工場建設までこぎつけた段階で判明した事は、中国棉花は概して短毛であり、それを原料として洋式綿布を製織することはできない、という事であった。アメリカ人技師に紡織機改良を依頼し、苦心の末にやっと開業までこぎつけるが、そこで製造できたのは厚地綿布の中の粗布と粗斜綿布のみであった。工場はそのころ低番手の機械製綿糸に対する需要が拡大するという思わぬ好運に恵まれたお陰で操業を続けることができたが、しかし、これも目標との関係で言えば明かに失敗である。機械への無智が招いた失敗であった。

機械への無智が上海機器綿布局の場合、失敗の原因になるとともに、結果としてアメリカ人技術者への依頼となつているが、この外人技術者依存が洋務企業での一般的現象であった。馮桂芬は「製造することができ、修理することができ、使用することができ、使用することができてこそ自分の利器である。」¹⁴と言い、人材養成の必要を説いたが、結果は決してそのようにはならなかった。清朝もその意図が全くなかったわけではなく、翻訳館を設立し、学校を建設し、留学生派遣を行っている。しかし、成果は全くといっていいほどあがっていない。洋務運動が外国人技術者への従属におちついた深刻な情況について、王韜は次のように嘆いている。

今沿海各省はどことも銃砲や船艦を製造する部局を設け、児童を選抜して留学させ勉強させている。これを外から見れば、非常に立派に見える。しかし、残念ながら、それは表面だけであつて、名はあるが実は少いのである。福

州で以前製造した汽船は、どれも西洋の古い技術のもので、識者には一顧だに値しないものであった。そこで製造した立派な性能を備えた機械は、必ず西洋人の指導に依っている。(中国人は)相手の意を察すれば、悠々として自足し、たちまち思考や智慧が西洋人に匹敵するようになったか、これを上まわるようになったと思うのである。¹⁵

洋務運動はこのように外国人技術者への依存におちいつていったが、その外国人技術者のためには、驚く程の高給を支払わねばならなかった。中国人鉞夫、運炭夫の年収が一両にも達しない時に、外国人技術者の月給は、少くとも一、二百両、多くて三、四百両であったという。中国人官僚が利益はすべて外人に歸し、中国人に残るのは損ばかりである、と抗議したのはもっともな事である。

このような多大な犠牲を払いつつ続けられた洋務運動であるが、その成果たるや王韜が嘆いていたように、時代遅れの代物を生産するだけであった。技術は進歩するのである。欧米の技術は日進月歩であり、中国が工場を建設すれば、それで「永遠の利」が図れるというものではないことがや々と理解されてくるのである。ここに到って中国には自らの欧米文明観に対して反省が起ってくる。「器」は単なる「器」として存在しているのではなくて、それを生み出す深い社会的原因がある、という認識が生じてくるのである。西欧文明そのものの再認識の必要性を彼等は自覚するのである。鄭観応の次の言葉は、そのような自覚を代表するものであろう。

西洋人が国を立てる場合、根本と末端とを備えている。礼楽による教化では遠く中国に及ばないが、しかし、富強を達成しているし、また本体と利用とを備えている。学校で人材を育て、議會で政治を論じ、君民一体、上下同心であり、必ず内容のあるものは実現させ、内容のないものはいましめ、よく計画し行動する。これが本体である。汽船、大砲、銃砲、水雷、鉄道、電線は、その利用である。中国はその本体を捨て、その利用を求めている。懸命に追いかけてはいるが、常に及ばない。戦艦を並べ、鉄道を四達させても、果たしてたのむに足ろうか。¹⁷

この言葉は、西欧文明觀の大転換を語つて余す所がない。西欧の「器」に注目するよりも、その背後にある社会と精神とに注目している。そしてそこにこそ、西欧の富強の真の秘密がある、と主張しているのである。

このようにして中国が西欧の「器」を具備することによって、独立富強を達成し、西欧に対抗できると考えた洋務運動は、自らの西欧近代文明に対する認識の淺薄さを反省することをもって終るのである。しかし、これで中国の西欧的近代化を追求する試みが終るわけではない。西欧先進国の支配という現実は巖然として存在してあり、それである限り中国に富強への願いが消滅することはない。そして富強の道は、強大な西欧に倣う以外にはない。西欧の富強の根源を「器」ではなく、「器」を生みだす社会にあると認識したのであれば、今度は中国社会の西欧的社会への改造でなければならぬ。こうして中国社会の改造の問題が富強達成の焦点へと浮上してくるのである。しかし、今度の運動は数百年にもわたつて続いてきた伝統社会を变革しようというのであるから、わずかではあるが「革命」運動としての色彩を帯びる。このような中国社会变革運動が康有為と梁啓超を指導者とする先進的清朝知識人層の運動「変法」運動であつた。

「変法」運動の目標は後述するように清朝封建社会を西欧的民主々義社会に改造することにあつたが、その理論的基礎は「啓蒙思想」にあつた。啓蒙思想は人間の「普遍性」と「進歩」とを二つの軸にする思想であり、あらゆる社会は「西欧的近代社会」に向つて「進歩」することを説くが、「変法」運動にある信念も、啓蒙思想のそれであつた。しかし、この信念をストレートに表現しない所に、この時代の中国の改革運動としての特質がある。中華文明の輝かしい伝統を誇る中国にあつては、中国文明の伝統の中にこそ、改革の根柢を設定しなければならないのである。改革運動を志した康有為の初期のテーマは、まさにここにあつた。彼は孔子思想そのものの中に、改革運動の正当性を根柢づけるのである。この目的のために執筆されたのが、「大同書」「孔子改制考」「新学偽経考」の三書であつた。

この三書を通して康有為が主張していることは、「進化」こそは世界の原理であるが、それは孔子の理想とする大同社会の実現に向う。孔子は大同社会の実現を目指す「改革者」であった、という事である。孔子を改革者とすることで、現在の改革を孔子思想の継承として根柢づけようとしているのである。彼の主著と見られる「大同書」は、壮大な構想を持った実に奇妙な書である。人間は現在九界の差別に苦しむが、次第にそれらの差別を除去しつつ、国家、家庭、男女、動植物の区別もなく、生きとして生ける者すべてが自由と平等を謳歌する「大同社会」へ到達する。その社会では科学技術の恩恵をうけ、生活は自動化され、人間の物質生活における苦悩は全く消滅するとされる。「孔子改制考」では、これまでの六経の刪述者とする孔子像を否定し、六経の制作者であり、改革者であった孔子像がうちだされる。そして「新学偽経考」においては、これまでの儒教は前漢末劉韻が偽作した經典に依るものであって孔子の微言大義は余く隠滅されてしまっている、と説く。このように非常に手のこんだ経義上の操作を行うが、康有為の意図は、あくまで中国社会に民主々義的改革を行うことにある。西欧社会の発展をすら孔子思想の中に包摂し、儒教思想の名において改革を行うことである。姑息な手段と言えば、姑息であるが実に中国的である。

康有為の改革運動は清朝皇帝に上書をくり返し、皇帝に改革を迫るというものであり、度重なる上書で康有名が主張していることは、中国の政治制度を大衆の声を吸収できる民主制へ変えることと、殖産興業の二つに集約できる。康明為が一八八八年に提出した第一上書で主張していることは、「成法を変え、下情を通し、左右を慎しむ」という三点である。新しい事態に対応できなくなった清朝の旧法を変え、上下の閉塞状況を打破し、下位の人間の声を聞き、有能な人材を登用するという事である。この三点の主張が彼の改革の基調となる主張である。第三上書では鉞山開發、鉄道敷設等六ヶ条の富国の法が提起される。第四上書では「国是の確立」が、そして一八九七年に提出された第五上書では、憲法と国会がとりあげられる。これが彼の改革案の最高調である。翌年の戊戌変法の時に出された第六六書

では主張は後退する。国是を定める、上書処を設ける、制度局を開くの三点が主張されるが、中でも「制度局の設立が変法の根本である」¹⁹として、法律局、財政局、農業局、工業局等の十二局の設立を提案する。このように康有為が提出した改革案の内容を見ていけば、彼が中国の富強の道は、欧米デモクラシーと産業振興にしかないと考えていた事がわかる。完全な中国社会の西欧化である。そして彼はこのような改革の必然性を「逃れるすべなき公理、法則」²⁰と考えていた。「世界の諸国をみますと、変法したものはみな強くなり、旧法を墨守したものはみな滅びております」²¹。これが歴史の現実が示す事実であり、従って中国の変法は避くべからざる歴史の必然だと彼は主張するのである。ここに「進化論」の大きな影響を見ることがができる。いかに粉飾をこらしても、彼の思考の基礎となっているのは「進化論」であり、目指す所は西欧型の民主々義社会であり、工業建設と産業振興であった。まぎれもない中国の西欧化運動である。

康有為の改革運動で特徴的なことは、このような改革を皇帝に依存し、皇帝の決断として実行しようとする所にある。彼は次のように皇帝、皇太后（西太后）に決断をうながすのである。

皇太后、皇上が奮起精励されて人心をゆり動かし、決然として治を望まれるなら、根本が確立しているのであるから枝葉末節は自らおさまり、大綱が既にあげられているのであるから、細目は自ら明かになり、草が風になびき伏すように下は上に従い、臣下は表情を変えて緊張するでしょう。天下が安らかに治まるか否かは、大みこころが厚いか薄いか、永続するか一時的なものか、に対応するものです²²。

このように皇太后、皇帝の決断を促し、まず彼等が「明詔を下し、咎を身に引き受けて己を罪し、群臣を戒め、恐懼反省し、意見を求めて治をはかる」²³ことから始めねばならぬ、と主張する。このような「上」からの改革案はロシアのピーター大帝、日本の明治天皇の改革に倣って着想されたものであるが、あまりに矛盾に満ちたものであった。日

本の明治維新は変革を望む大きな社会的勢力があつて可能となつたもので、天皇一人の力によつたものではない。清朝の改革を望むのは、康有為等の少数の知識人のみである。啓蒙主義的改革というものは、封建体制を全面的に否定するものであり、そのために西欧では多くの血を流した市民革命がくりひろげられたのであつた。このような社会的利害の大衝突を、皇帝一人の決断で実行しようという改革が成功するはずはない。光緒帝に托した康有為等の改革は、西太后を頂点とする清朝守旧派の反撃にあつて、もろくも崩壊する。それは当然と言えば当然のことであつた。

戊戌政変の失敗が中国の心ある人々に残したものは、清朝の無能と腐敗に対する強い印象であつた。中国富強の道を清朝に托することへの絶望感である。中国社会においては、康有為等の漸進的な改革案すらなお「過激」だとする空氣が強かつたが、知識人の間での空氣は清朝打倒を目標として掲げる「革命派」の時代へと、大きく転換していく。变法派と革命派との間では、清朝の改革か革命かという点では激烈な論争がくり返されるが、しかし、両者は思想においては、殆んど同質のものを共有していた。西欧化を目標とする点でも、進化論、啓蒙思想を信奉する点でも、両者は全く同一であつた。戊戌变法の失敗において問われたのは、清朝であつて、西欧化を目指した改革そのものではなかつたのである。その目標が、次の時代にはより激烈な方法においてその実現が追求されていくことになる。

三、啓蒙思想による「革命」

戊戌政変失敗後の思想界を代表するのは、一世の啓蒙思想家、梁啓超の活動である。彼において中国の啓蒙思想は十全に開在する。梁啓超の政変運動失敗への反省は、中国人の精神と人間性に失敗は原因するといふものであつた。中国人の愛国心の欠如、奴隸性、愚昧、個人主義、怯懦等々といった民族精神が中国の「積弱」を招いた根本原因だ、と彼は主張する。従つて彼は中国人そのものが新しい人間として生れ変わる以外には、中国富強の道はない、とする。

このような主題で書かれたのが「新民説」である。この論文は啓蒙思想家梁啓超の面目躍如たるものがある。

「新民説」において梁啓超が「新民」の条件として主張したのは「公德」である。「公德があるのを知って、新道徳が生れ、新民が生まれる」のである。人間は公德を持つことによって「合群」することができ、真の意味での「国民」になるのである。この「新民説」で梁啓超が展開しているのは、奴隷性を払拭した真の主體的な個人となった人間が「合群」して作りあげる国家の構想である。このような「新民」による国家であつてこそ、中国は真に富強となりうる。梁啓超はこのように主張するのである。注目すべきことは、このような国家に中国を改造するために、彼が激烈な「破壊」を主張していることである。彼はアメリカ、フランス、イギリスの市民革命の例をあげ、次のような大胆な主張を展開する。

破壊はついに免れることはできない。一日早ければ、一日の福を受け、一日遅るれば、一日の害を受ける。³

そうして彼は「数千年来の横暴混濁の政体」と「数千年来の腐敗柔媚の学説」は、ともに徹底的に破壊されねばならない、と続ける。⁴このようなあまりに「過激」な主張をした梁啓超は、その後「世界共和政体の祖国」としての憧憬の地アメリカを訪問し、共和制の現実に失望し、またアメリカで見た中国人達の民族性にも失望し、ついに中国人は「ただ専制を受けることができるだけで、自由を享けることはできない」と宣言し、光緒帝を頂く「開明専制論」へと転換する。しかし、「新民説」が噴出させた梁啓超の清朝のみならず、中国それ自身への怒りのパトスこそは、革命派が生成する民族精神の所在を語るものであった。

革命派は満州族の王朝、清朝を打倒し中華民族の独立を目標とする点では一致していたが、その内部には様々な立場の人を含んでいた。章炳麟のように「亜洲親会」を結成しアジア人の連帯を説くとともに、国内では徹底した国粹主義の革命を主張した思想家もいる。しかし、革命派の中心をなすのは、孫文をも含めて「啓蒙思想」に依拠して

「革命」を主張する西歐化論者であった。例えば「革命軍」によって一世を風靡した「革命派」の理論家鄒容は、ルソーを讚美して次のように言う。

ルソーら大哲人の微言大義は、起死回生の靈藥、魂をよみがえらせる処方、金丹が胃を変え、靈藥が効くように、フランス、アメリカの文明は、ここに胚胎する。わが祖国は今日病んでいる。死している。靈藥を飲み、処方を得て生きようと望まないであろうか。もしそれを望むなら、私はルソーら大哲人の宝の旗を手にとって、わが神州の土になびかせたい。

また「警世鐘」「猛回頭」を書き、日本政府の中国人留学生への侮辱に抗議の自殺をした熱血漢、陳天華も同様であった。彼も「五大陸の諸国を見て最も平等で、最も自由で、極楽世界と言えるのは、アメリカではないであろうか」と、共和制の祖国アメリカを絶讚する。一省独立の革命路線を主張した楊毓麟の立場も、同じく啓蒙主義であった。彼も言う。

天賦人權は人類の公理であり、天下の正義である。もしもこの正義を抑圧して伸長させない者があれば、臥薪嘗胆、劍で米をとき矛で飯をたき、対決することを願うだけだ。

孫文としてその例外ではない。孫文は若くして欧米生活の経験が豊富であったので、欧米社会がルソー等の思想家の説く理想そのままの社会ではないことをよく承知していた。むしろ欧米社会はその社会的矛盾から、「革命」が避けられないとすら考えていた。従って彼は欧米社会の矛盾を解決し、「文明各国が将来手本とする」社会を中国に創ることを目標としていた。「民生主義」、特にその中でも「平均地権」の思想は、そのような意図の下に構想されたものであった。そこには社会主義的要素が含まれている。しかし、孫文の「三民主義」も決して共和制の範疇を超えるものではなかった。彼の思考の基調にあるのも「進化論」であり、やはり啓蒙思想の理想とする共和制国家の建設を目標

としていたのである。

革命派の若い革命家達は、鄒容にしても陳天華、楊毓麟にしても非常に純粋に啓蒙思想に傾倒していた。そしてこの純粋性が彼等の烈しい革命的情熱となっていたのもあった。しかし、この純粋性が啓蒙主義の思想と現実のフランスやアメリカ、イギリスといった国の存在とを混同させ、現実の帝国主義国を美化する、という結果にもなっていた。このような革命派の持つ弱点が表れたのが、中国分割の危機をめぐる変法派との論争であった。変法派は「帝国主義が在華既得権益を維持し、中国侵略をすすめるためにはけつして中国が富強になることを許さないのは当然である。帝国主義国がいかに国際法を遵守すると称しても、彼らは自国の利益のためにならず口実を設けて出兵干渉するにちがいない¹⁰」という、厳しい帝国主義への認識の下に、次のように主張した。

瓜分の声、蛙鳴のごとく耳に噪いしときに中国の瓜分をもつとも恐れる。いったん中国に内乱をおこせば、列強はかならずこれに乗じて唾啞の地を攫取して亡国の日となる¹¹。

このような変法派の主張には、革命を避け「開明専制」を合理化するための強い意図が働いている。しかし、ここに披瀝された帝国主義観は厳しく、徹底している。このような徹底した帝国主義観に比較すれば、革命派の主張には、帝国主義国への期待や依存が見られ、甘さがつきまとうている。例えば国際法に対する信頼である。「文明国の義務をつくし、文明国の権利を享けるのが各国の通例である」から、革命においても「自ら交戦団体の国際法上の地位を明かにし、戦時法期の慣行に忠実に行動すれば、自分が自らを侮らない限り、誰か侮ることができよう¹²」というわけである。また民主主義革命への共感を前提にした主張もある。「今日では専制を退け、民権を伸長するのは万国の通例であり、必ずしも干渉の原因とするに足りない。この原因がなければ（干渉という）事実もないであろう¹³」という具合である。また中国が帝国主義の傀儡政権を倒すことは、列強の勢力均衡の問題を解決するから、世界平和のため

に資する所大きく、世界から歓迎される、という意見もある。¹⁴どの意見も帝国主義国を経済的利権の追求を目的とした存在である、という帝国主義国の原点を見失っている。それを一種の「文明国」と観念し、その事に期待をかけているのである。

このような帝国主義国へ期待をかける態度は、孫文にもある。孫文の帝国主義観を示す代表的論文は一九〇四年に発表された「中国問題の眞の解決」であるが、孫文は次のように言う。

列強各国は、中国に対して二種類の相互に衝突する政策をとっている。一つは中国の分割を主張し植民地化を推進する。他の一つは、中国の統一と独立を擁護するものである。¹⁵

このような帝国主義観から、革命派の列強への依存政策が出てくる。孫文の行動の軌跡を追っていけば、常にどこかの帝国主義国へ援助要請を行っていることがわかる。彼は帝国主義国と武器と資金に依存することによって、中国革命を遂行しようとしている。そして援助要請の相手は次々と変っている。それは次のようなものだと言われている。

孫文は一九〇〇年前後から一九〇七年まではフランスの支援を、一九〇九年からはアメリカの支援を、辛亥革命勃発後には欧米の支援を、一九一七年からはアメリカとドイツの支援をそれぞれ獲得しようとしている。¹⁶

孫文のこのような帝国主義国への支援要請を、単なる帝国主義国への依存政策とだけ言いきることはできない側面がある。弱小な革命勢力が、強大な列強支配の中で自己の意図を貫徹するための、孫文一流の戦略であったという面を無視できないからである。最大の敵を討つためには、完全な味方でなくとも、手を結べる力とは連合していくというのは戦争の基本原則である。孫文の政策は、そのような性質を持っている。孫文は個人的には壮大な「世界革命」の持主であり、それを追求する手段としてこのような戦略をとったとも考えられるからである。日本の大陸浪人、宮崎滔夫を魅了しつつしたのも、革命家孫文の壮大な世界革命の志であった。¹⁷孫文が単なる権謀術数家ではなく、世界革

命を志す革命家であつたことは事実であろう。しかし、現実の革命家、孫文の行動は世界革命とは程遠い、帝国主義国間を援助要請に奔走し、武装蜂起をくり返すことについてやされていたのであつた。そのような中で一九一一年の辛亥革命を迎えるのである。

辛亥革命後の孫文も、これまでの帝国主義国への依存政策をそのまま継続する。武器と資金、そして投資や借金を求めて相変わらず帝国主義国への依頼と交渉に全力をつくすのである。武昌蜂起が成功するとアメリカに滞在していた孫文は、列強の革命干渉を防止する目的でアメリカ、イギリス、フランスを歴訪し、政府要人や民間有力者との会談を重ねて歸国する。そして中華民國臨時政府の臨時大統領に就任した孫文は、一九一二年一月「対外宣言書」を発表し、清朝政府が締結した条約、借款および賠償金の権利は、すべて共和国政府が尊重することを保障する。帝国主義国の干渉を防止するための配慮である。その後日本に対して三つの借款の交渉を行うが、どれも成功しない。臨時大統領を袁世凱に譲り退任した孫文は、三民主義の民族、民権の両主義は既に達成されたものとして、残る民生主義を解決するための実業振興の中心政策として鉄道建設計画を発表し、その実現に努力を集中するが、これも資金が集まらず、列強の投資もなく、わずか日本との間に中国興業株式会社創立が成約することだけが成果であつた。その後孫文は袁世凱を打倒する「第二」「第三革命」の基地として日本を選び、日本の政財界及び宮崎滔夫等の民間の士の援助を得るために、度々会議し、交渉をくり返している。三井物産の渋沢栄一とは六回も会談しているし、大倉組それに当時の陸軍経理部長、辻村楠造とも接触している。久原房之助からは六〇万円の借款を獲得することに成功している。これは日本が対英政策上、孫文の計袁運動を援助したからである。従つて袁世凱政權が倒れると日本は一転して軍閥、段祺瑞に援助を集中し、孫文は見捨てられる。第三革命で勝利した孫文は、資金難におちいり軍隊を解散しなければならぬ苦境に追いこまれる。こうなると孫文が選んだのは、第一世界大戦での参戦問題で日本と対立関係に

あったドイツとアメリカである。一九一七年四月、在上海ドイツ総領軍とひそかに会談し、段政権打倒のために三〇〇万円を提供する約束をとりつけている。また一九一七年八・九月には、胡漢民とともにアメリカ広東総領軍に財政的援助、武器の提供、広東政府の承認を要請している。一九二一年九月には、第二次広東政府は、アメリカの門戸開放主義を支持することを述べ、南京政府の支援を要請している。¹⁸

このように辛亥革命後においても孫文の帝国主義への依存政策は続いている。弱く幼い革命を救うための必死の努力ではあったが、しかし「革命」は孫文の努力にもかかわらず、予期された結果と全く逆の方向へと進んでいった。革命派の啓蒙思想の立場からすれば、辛亥革命は中国の輝く共和制への道を切拓くはずであった。しかし、結果は英国の傀儡、袁世凱の権力掌握であり、袁世凱の死後はそれぞれの帝国主義国に支援された軍閥混戦の時代である。この間、孫文は「三民主義」を掲げて「革命」の目的を貫徹するために闘い続けるが、欧米の「共和国」が支援したのは、共和制の理想を掲げる孫文ではなく、何の理想も理念も持たぬ封建軍閥であった。このような苦難の体験を経て、孫文の帝国主義観は次第にとぎすまされたものとなっていく。一九一七年孫文が朱執信に指示して書かせた「中国の存亡問題」は、孫文の帝国主義観の大きな前進を示す注目すべき論文である。

この論文でまず注目されることは、孫文がドイツⅡ強権、協商国Ⅱ公理という当時の世界的常識をはるかに越えて、欧米資本主義の本質を鋭く見ぬいていることである。この論文は、もし協商国が「公理」を代表するものであれば、イギリスがトランスヴァール、インド、マラヤ、ビルマを併合したことや、中国にアヘン吸飲をせまり国土の一部を奪ったことに、いかなる「公理」があったか、と迫る。フランスのベトナム併合、ロシアが満州を併合した事も同様である。そして次のように結論する。

この数十年の歴史について言えば、高論しうることはないのであって、協商国も強権であって、公理なき者では

ないか。¹⁹⁾

このような認識は、かつての列強を二種類に分けた帝国主義観から一歩進んだことを示している。帝国主義観だけではなく、西欧近代国家そのものへの認識の深まりを示したものと考えることができる。美しい理念の言葉で修飾されていても、その根底にあるのはともに「強権」にすぎない。このような西欧文明に対する醒めた眼があるからである。そしてそれは次のような認識へと展開している。

欧米人が公理を言い、正義を言うのは、すべて白色人種を範囲としており、未だかつてわれわれ黄色人種に及んだことはない。²⁰⁾

この言葉は「公理」「正義」という美しい理念の適用範囲が、「白色人種」「黄色人種」という立場と密切不可分なものであることを鋭く指摘したもので、この認識は重要な意味を持つ。それは孫文における「啓蒙思想」との訣別の言葉とも受取れるからである。啓蒙思想は、人類的普遍性で「進歩」や「自由」「平等」を説いたが、孫文は「われわれ黄色人種」とっては、この思想は「虚妄」だと語っているのである。この時点で孫文は啓蒙思想に替る新しい思想は提示しないが、ここでその後孫文が発展していく立場は明確にしているのである。「白人種」から抑圧され、支配されている「黄色人種」という立場である。このような立場から、自らにふさわしい道をさぐり出さねばならない。孫文の認識はこのように宣言する寸前まできている。少くとも洋務運動以来続けられてきた中国を西欧化することが中国を富強にする道だとする、単純な西欧化運動はここで終止符を打たれたと考えねばならないであろう。「黄色人種」たる中国は、決してストリートに西欧と同じ「進歩」の道を歩むことはできない。列強との度重なる交渉の中で、西欧帝国主義の何たるかを知った孫文は、その言わざるを得なかったのである。ここには新しい出発はない。しかし、一つの時代に対する終止符だけは間違いないくたわれたのである。

しかし、この時点において孫文は、未だ帝国主義への依存政策から完全に離脱しきつてはいない。前半ではあれほど透徹した帝国主義観を展開しつつも、それに徹底しきつていないのである。後半では彼は日本とアメリカへの大いなる期待を語る。日本が袁世凱に提出した二十一カ条要求を、孫文は「日本の真意」ではなく、袁世凱が日本に迫って提出させたものだと言い、日本を弁護する。²¹そして日本とアメリカへの期待を次のように語る。

中国が今日友邦を求めようとすれば、日本と米国外にはない。日本と中国の關係は、実に存亡、安危ともに相かわる關係である。日本がなければ中国なく、中国なければ日本はない。兩國が百年の安泰を謀るためには、兩國の間に少しのわだかまりがあつてもいけない。次は米國である。米國の地位はわが國と遠く離れているが、地勢から言つても、当然わが國を侵略せず、友とするであらう。まして兩國は民主々義國である。道義から言つても助けあうべきである。²²

孫文が語った日本への信頼は、第一次大戦後の日本の山東問題に対する態度で見事に裏切られる。その後、日本の対支侵略政策は、益々本格化し、孫文は日本を最も危険な帝国主義國として対日批判を強めていくのである。そしてアメリカは孫文の第三次広東政府が、「関余問題」を契機に広東税関の接收計画を實行しようとする、共同干渉國の一つとしてやはり軍艦を派遣する。やはりまぎれもない帝国主義國であつたのである。

このような現実には、当然孫文に認識の変更を迫るものである。孫文が反帝路線へ前進するためには、あと一つの契機がありさえすればよかつた。孫文のこの一步の前進によって、中国のナショナリズム運動は啓蒙思想と完全に訣別し、反帝路線による植民地民族解放闘争へと転換していくことになるのである。

近代世界システムの独特な性格と西欧啓蒙思想の影響で、中国民族は世界における自己の眞の位置を見出すことができず、自己解放の道も西欧社会の模倣を出ることができなかつた。しかし、長い試行錯誤の末にやっと中国民族は

世界システムにおける「支配」への認識を深め、そこにおける自己の位置についての自覚を得たのである。そこから中国民族の真の自己解放の闘いが始まる。

四、孫文における植民地解放論の形成

帝国主義諸国の侵略の前に亡国の危機に直面している祖国の現状を見、また期待をかけた帝国主義国からは裏切られ続けてきた孫文が、徹底した反帝国主義の立場に移行するためには、ただ一つの条件だけが必要であった。齒まで武装した強大な帝国主義諸国に囲まれて、そのような立場が現実貫徹できるかどうかというその成算である。いかに正当な主張であっても、それが実現不可能であるような政治路線は、政治闘争の場では全く意味をなさない。孫文が常に妥協的な依存政策を採らねばならなかったのは、ここに理由がある。徹底した帝国主義国との対決路線というのは、中国の現状からすれば必然的なものであり、孫文にもそのパトスは最初からあった。孫文の革命家としての出発を記念する「興中会宣言」には、反帝救国の情勢があふれている。しかし、全帝国主義を敵として闘いぬける程に、孫文の革命運動は強力ではなく、資金と武器においてどこから援助を得ることは孫文の革命運動にとっては、不可欠の条件であった。彼の帝国主義列要の間を巧みに遊泳していく行動は、その必要のためのものであった。このような孫文にとって、転回の決定的な契機となったのは、一九一七年のロシア革命であった。孫文がロシア革命に反応するには少し時間が経っている。一九一九年になると孫文はこの中に、徹底した反帝闘争の可能性と勝利の展望を見るようになる。そのことが彼の近代世界に対する認識を深めるとともに、その革命運動を反帝闘争へと踏みきらせる決定的な一歩となったのであった。

辛亥革命の挫折によって失意のうちにあった孫文にとって、ロシア革命の成功は大きな啓示であったが、それは二

つの点においてであった。一つは彼がその中に「人類の大きな希望¹」を見たという点においてであった。人類史に大きな可能性がロシア革命によって切拓かれたという確信が、孫文を大いに鼓舞している。孫文がロシア革命の中に見たのは「強きを抑え、弱きを助け、富める者を圧え、貧しき者を救う」思想であり、「もっぱら正義を拡張し、不公平をうづため」の行動であった。² このロシア革命に列強が反対するのは、「ヨーロッパ各国が侵略を主張し、強権があるだけで公理を欠いている」のに対して、「ロシアの新主義は、公理をもって強権を撲滅することを主義とする」³。たぬだと、孫文は見る。そしてロシア革命によって生れた世界の新しい可能性を孫文は次のように展望するのである。

これら被圧迫の国家連合は、必ずそれら強暴な国家と命がけて戦うのであろう。全世界はと言うと、将来白人の公理を主張する者と黄色人種の公理を主張する者とは必ず連合し、白人の強権を主張する者と黄色人種の強権を主張する者も、また連合するであらう。この二種の連合があれば、どうしても一つの大戦は避けられない。これが世界の将来の戦争の趨勢であらう。⁴

孫文がロシア革命の中に見た「人類の大きな希望」とは、被圧迫民族と被圧迫階級の強権と抑圧に対する戦いの必然性であり、その勝利への大きな可能性であったのである。それは同時に「公理」が「強権」を撲滅することでもあった。人類史に「公理」の時代が来る。しかし、その前に「強権」を撲滅するための人類的大戦争は避けられない。これがこの時点で孫文が持った歴史に対する見通しであった。

ロシア革命がもたらした人類への「大きな希望」を現実化する方法論をも、孫文はロシア革命の中に見出している。それがロシア革命が孫文に与えた第二の啓示であった。辛亥革命失敗後の孫文は、明確な革命の方法論を持ってないでいた。彼は辛亥革命の失敗は、「知ることは難きに非ず、行なうこと惟れ難し」という迷信に敗れたことによるとして、新しく「行なうことは難きに非ず、知ることは惟れ難し」というテーゼを提出し、辛亥革命失敗の重要な原因とし

て、「法治の根本たる宣誓の典礼をやめた」ことにあつたと総括する。しかし、このような総括が、次の展望を開くに十分でないことは、孫文が一番承知していたであらう。このような孫文は、ロシア革命、特にレーニンの党組織論から大きな刺戟をうける。彼はそこに今後の中国革命の進むべき道を見るのである。

なぜにロシア革命は成功し、中国は成功しなかったのか？思うにロシア革命が成功したのは、まったく党員の奮闘によつたからである。一方では党員が奮闘し、他方では軍隊の援助があつた。だから成功したのである。したがつてわれわれが革命に成功しようと思うならば、ロシアの方法、組織及び訓練に学ばねばならず、そうしてこそ成功の希望も持てるのである。

孫文がロシア革命の成功から得た示唆は、「人民の心力を以てわが党の力となし」「人民の心力をもつて奮闘する」という「人民」と一体となつた「党」の構想であつた。このような「党」を形成することで中国革命も勝利することが可能だ、と孫文は確信を持ったのである。

ロシア革命から大きく鼓舞された孫文に勇気を与えるもう一つの事件があつた。中国の「五四運動」である。「五四運動」は、孫文にはロシア革命の成功が中国でも実行可能であることを実証した事実であると思えたのである。人民の団結、文化的啓蒙の力、それが歴史を大きく変えていくことを示した事件だとして、孫文は「五四運動」を非常に高く評価する。次のような言葉がそれを示している。「きわめて短い期間に絶大な成果をおさめた。そのことから団結すれば強いということがわかる。」「そのはじまりはと言うと、出版界の一、二の目覚めたものが提唱したにすぎない。それがついに燎然として異彩をはなつ輿論となり、学校騒動が膨漸として全国に広がり、人びとはみな良心を激発され、死をとじて愛国運動をおこなつた。もし運動をひきつづき高揚できるなら、将来、収める効果の偉大にして永遠なること、疑うべくもない。(中略)したがつて、このような新文化運動は、実に、もつとも価値のあること

である」。

ロシア革命と五四運動に見た可能性で、孫文の認識は大きく深まり、彼は徹底した反帝国主義路線へと踏み出していく。孫文のこの転回の前提となったのは、祖国中国に対する新しい認識であった。孫文には革命運動の初期から祖国中国が列強の侵略にさらされ亡国の危機にあるという認識はあった。しかし、同時に中国が近代化することで、列強支配の軛から逃れることが出来るという楽観論もあった。しかし、孫文が新たに得た認識は、全く楽観論を排した深刻で、徹底したものであった。彼は言う「中国は一国の植民地であるだけではなく、各国の植民地であり、われわれは一国の奴隷であるだけではなく、各国の奴隷である」、この状態は半植民地どころか、植民地よりもっともひどいものであり、植民地以下という意味で「次植民地」と呼ばれるべきである、と。このような「次植民地」とっては、ストレートな近代化など問題にもならない。何よりもまず必要なのは「独立」である。後期「三民主義」とは、このような立場から、前期「三民主義」の目標を再把握し、再編成したものである。

前期の三民主義においては、民族主義は漢民族の清朝⇨満州族の支配からの解放⇨独立という内容のものであった。しかし、後期のそれは徹底した反帝国主義路線として提起される。「思うに、民族主義はいかなる階級にとつても、帝国主義の侵略を排除すること以外に意義はない」。民生主義についても、同様である。中国の民生問題を解決するためには、中国の民族工業を発達せねばならないが、不平等条約体制下で外国商品が不当な税制上の優遇措置を受けている限り、民族産業が成長することは困難である。こうして孫文は民生問題の解決も、反帝国主義的政治の問題から着手しなければならぬ、として次のように言うのである。

われわれは民生問題を解決しようとして、もっぱら経済の範囲から着手すれば、決して解決することはできない。もし民生問題を本当に解決しようとするのであれば、政治上から着手しなければならない。すべての不平等条約を

打破し、外国人が管理する税関を回収してこそ、われわれは自由に加税し、保護政策を實行できるのである。¹³

このような反帝路線は、これまでの孫文に宿阿の如くつきまといっていた帝国主義國への依存政策と、彼が完全に訣別したことを示している。帝国主義國への期待と幻想を完全に払拭したのである。そしてそのことは同時に、彼が植民地人にとっては啓蒙思想が、虚妄であるのみならず非常に危険性を持つものであることを深く自覚することでもあった。

五四文化運動の中で提唱された一つの主張に「世界主義」がある。孫文はそれは「形を変えた帝国主義と形を変えた侵略主義」に外ならず、列強がふりまく「謠言」であり「嘘」だと断言する。¹⁴そして植民地の被抑圧民族の立場から「この道理は虐げられた民族の語るべきものではない。われわれ虐げられた民族は、まずわれわれ民族の自由、平等の地位を回復しなければならぬ。そしてこそ初めて世界主義を語る資格をもつのである」と主張する。¹⁵孫文は「人類的普遍性」で語る啓蒙思想が、いかに植民地の人間にとつては偽瞞的なものであるかを、痛烈に告発しているのである。啓蒙思想の最高の目標である自由、平等についても、孫文は同様な態度をとる。彼は中国革命の目的をそのような市民革命の目標と同一視することを、断固として拒否する。孫文は外国は個人の自由のために革命を戦ったが、中国革命の目的は個人の自由ではない、と言う。個人が自由でありすぎると、ばらばらな砂のようになり、大きな団体に結合できず、革命の目的は、永遠に達成できない。中国革命の目的は国家の自由の獲得にこそある、として彼は「民族主義の實行は、国家のために自由を戦いとすることである」と言う。¹⁷自由・平等の理念が中国革命には不適合であると言うのみならず、その理念がもたらす結果についても、孫文は批判的である。孫文は次のように言う。

「欧米は平等、自由のために戦争したが、これをたたかいたると、つねに平等、自由によって傍路へと引きこまれた」。¹⁸市民革命の結果が、決してその理念の実現となっていないことを、孫文は批判しているのである。このように孫文は啓蒙思想に鋭い批判を行い、それから訣別していくが、そのことは急速な社会主義思想へと接近していくこと

であった。彼は民生主義を社会主義と同一視して次のように言う。「民生主義とは社会主義であり、また共産主義とも名づけられ、つまり大同主義である」¹⁹。また孫文は共産主義と民生主義は、理想においてなんの区別もなく、その方法において区別されるだけだ、とも言う²⁰。また中国の民族主義の世界に負う責任について語る孫文には、マルクス主義の「世界革命論」を彷彿させるものすらある。彼は言う。

われわれは弱小民族に対してはこれを援助し、世界の列強に対してはこれに抵抗しなければならぬ。もし全国人民がみなこの志を立てるならば、中国民族は発達できるであろう。もしこの志を立てないのなら、中国民族には希望はない。われわれは今日、まだ発展に先立って、傾けるを助け弱きを救うという志を立て、将来強大になった時に、今日身を受けている列強の政治、経済上の圧迫の苦痛を思い起し、将来、弱小民族がもし、この種の苦痛を受けているのなら、われわれは帝国主義を消滅しなければならない。それでこそ国を治め天下を平らかにしたことになるのである²¹。

この孫文の言葉は、プロレタリア国際主義を主張するロシア革命の思想と全く同質のものである。孫文自身は終生「三民主義」を主張し、マルクス主義とは厳しく一線を画し続けるが、内容的には殆んど同じ内容のものとなっている。

晩年の孫文におけるこの転回によって、中国のナショナリズムも大転回をとげることになったのである。これまでの中国の民族運動は西欧化を目標として展開されてきたが、孫文において初めてそのような啓蒙的思考と訣別し、明確な「次植民地」という自国の現状に対する深い自覚に基いた運動が構築されることになったのである。その運動は、反帝闘争——社会主義という性格を明かにしたものであった。ここにおいて中国ナショナリズム運動は新しい段階へと脱皮した。このことはそれからの中国の民族運動に大きな影響を及ぼす画期的な出来事であった。この事は孫文と

いう偉大な人格によって成しとげられたが、同時にそれは中国近代史の苦難を歴史的に総括した民族的認識の集大成という性格のものであった。

革命運動の方針の転換を明かにした孫文は、「三民主義」の旗を掲げて、ソビエト共産党と連携し、その援助を受けつつ新しい革命運動の構築にとりかかる。具体的には国民党の改組、国共合作の推進、大衆の組織化である。国民党の改組の目的は、思想と組織が一体となったボルシェヴィキ型の党に国民党を再組織することである。国共合作はソビエト共産党の指導を受け入れた結果ではあるが、民衆に依拠するという孫文の新しい方針の具体化でもあった。そして民衆の組織化こそは、これまでの帝国主義依存に替わる真の革命運動の基盤となるものであった。国民党第一回全国代表大会宣言が「民族主義が、実は健全な反帝国主義であることを実証しようとすれば、国内のさまざまな平民階級の組織を援助して国民の能力を発揚させるように努力しなければならない。思うに、国民党と民衆が深く結びついた後にはじめて中国民族の真の自由と独立に希望が持てるのである」²²と宣言通りである。孫文は一九二四年には、有名な「耕者有其田」のスローガンをうちだし、農民運動の組織化、農民自衛軍の結成を呼びかける。そして二四年五月の広州のメーデーでは、約一万人の労働者を前に演説する。そこで説いたことは、労働者の団結の必要性、不平等条約を打破するための反帝国主義闘争にたちあがることの必要性の二点であった。²³

国内において革命運動の新しい展開を積極的に進めるだけではなく、孫文は反帝闘争の世界的規模での展開を構想している。晩年の「大アジア主義」の提唱がそれである。孫文の言う「大アジア主義」とは、「覇道の文化」たるヨーロッパに対する、「王道の文化」であるアジアが対決する事である。そして「王道の文化」を基礎とすることに、よって、不平等を打破し、あらゆる民衆の平等と解放を実現しようと孫文は言うのである。最後にアジアで唯一国、帝国主義国への道を歩みつつある日本に、孫文は次のように呼びかける。

あなた方日本民族はすでに欧米の覇道の文化を身につけると同時に、またアジアの王道文化の本質も持っています。これからの世界文化の前途に対して、つまり所西方の覇道文化の番犬となるか、東方王道文化の干城（守護の役をはたす人）となるか、これはあなた方日本国民がよく考え、慎重に選ぶところであります。²⁴

この「大アジア主義」の基底にあるのは、徹底した西欧近代を否定する情念である。ただ武力と機械文明のみを発達させ、精神性を欠いた西欧文明に替って、人間性と精神性の豊かなアジア文明を復権させることが、世界民族の平等と解放を実現することだと、孫文は考えている。欧米諸国に対するアジア諸民族の連帯によって、このような世界を創りあげようとする構想には、近代世界における中華民族の苦難の体験が息づいている。そしていかにも孫文らしく壮大で、そこに若年の孫文のあの「世界革命」への志が蘇ってきているのを見ることがができる。しかし、この構想は何の成果もあげることではできなかった。日本は孫文のこの呼びかけにもかかわらず、帝国主義国の一つとして中国侵略に遭進することになるのである。

「大アジア主義」の提唱と同様に、孫文の労農民衆の組織化と革命化という方針も、孫文自身においては、殆んど見るべき成果を残していない。国民党改組と国共合作は党内の大きな反対を抑えて、何とか乗りきることができたが、続く大衆の組織化となると、孫文は殆んど問題を放置しているのである。孫文が実際の農民運動に言及したのは、「農民大聯合」と「耕者要有其田」の二度にすぎないし、²⁵労働者の前で演説したのは、広州のメーデーでの演説ただ一回だけである。そして孫文自身、大衆運動に対してはかなり懐疑的な態度を残している。孫文の大衆運動に対する態度を、池田誠氏は『一方ではその偉力に驚き、へ人民の力』が政治の舞台に躍りでたことを承認しながらも、他方ではその「人民の力」に危険を感じ、「温和な社会思想」によってそれを指導しなければならないとしている。²⁶と言

うが、正確であろう。孫文は決して無条件の大衆の立上りを期待していたわけではない。「耕者要有其田」では、地

主と農民がともに納得し、利益があるような隠健な改革を説いている。孫文においては、やはり民衆の組織化という問題は、残されたままになっているのである。

洋務運動と変法運動は近代世界の目標をそのまま植民地社会中国での改革の目標としたので、その運動は近代世界の中に吸収されてしまい、当然の結果として失敗に終わった。これに対して後期孫文の意味は、近代世界システムにおいて被抑圧民族、「次植民地」の位置にある中国にとって、民族的解放への道はまず抑圧を排除する以外にはないことを明確にした点にある。近代世界とそこでの自国の位置への十分な認識と洞察を欠いていた先行の諸運動に対して、まさにそれへの認識と洞察を出発点にした所に、後期孫文の絶対的優位性はある。近代世界システムにおいて被抑圧の立場におかれた人間にとっては、まず抑圧を排除すること、そして次には抑圧を生みだすシステムの構造そのものあり方を変革すること、それ以外には真の人間の解放を実現する道はない。孫文の晩年における到達点は、近代世界システムにおける中国民族の、そのような人間としての当然の要求と進むべき道をさぐりあてたものであった。しかし、そこで残された問題は、人間としても民族としても、当然すぎる要求がこの近代世界において実現可能なものであるかどうか、ということであった。民衆の組織化、連ソ容共という方針で、近代世界システム自体を変革するという、巨大な力量をくみ出すことができるかどうか。

この問題こそがその後中国ナショナリズム運動が、そのために苦闘する課題となる。そしてこの課題は現在に至るまで解かれてはいない。孫文自身は自らの「三民主義」が、そのための指導思想でありうると堅く信じていたが、現実には「三民主義」にはその思想的力量はなかった。近代世界との全面的対決を意識化した時、この近代世界の非情で冷酷な論理に立向うだけの厳しさをそれは欠いていたからである。この問題は後述するが、ただマルクス主義だけ

が、それだけの非情さと戦闘性を持ち合わせていた。孫文が設定した中国ナショナリズム運動の路線は、マルクス主義運動によって継承されていくことになるのである。

五、マルクス主義の選択

五四運動期は様々な西欧近代思想の潮流が一斉に流入し、中国思想界が空前の活況を呈した時代である。中国の「シュトルム、ウインド、ドラंक」の時代とも言われるが、まさにその名にふさわしい時代であった。全国各地には数多くの団体が結成され、活発に思想活動を展開したし、五四運動後一年間に出版された新刊は四百種以上にも達している¹。陳漢楚はこの時代に存在した主な思想潮流を、左翼と右翼を含む三民主義、梁啓超、張東孫の研究会系、胡適派、無政府主義、合作主義、工読主義、マルクス主義の九つの流派に分類している²。そしてこれらの思想潮流は「中国はどこへ行く、いかに社会を改造するか」という中心テーマをめぐって、それぞれが力を競い合ったのであった。あまりに理想主義的なため自滅していく思想運動も多かった。例えば「新しい村運動」である。これは日本の武者小路の実験を中国に移入したものであるが、実際に北京大学学生宿舍で実行されている。資金を集め食堂、洗濯場、印刷工場を作り、社会人の学習を援助するための「英算専習館」も運営している。四時間の労働、四時間の学習、各人がその能力をつくし、生活必需品は必要に応じて受取るという新社会の胚芽を作るという目的を持った実験であった。しかし、この運動はわずか数ヶ月で、内部における意見の衝突から蹉跌している。これと同時に、上海の「平民学社」が行った合作運動も、これと同じように失敗に終わっている。また「自由」「互助」をモットーとする工読互助団は、学習と労働を統一した生活の創造の試みを行っているが、これは経済的な行きすぎりから、解散のやむなきに到っている。第一団は十数名の構成、他に第二団と女子団があったが、相互間の交流もなく、運動としても未

熟であつたようである⁵。

このように自然消滅していく団体が多かつた中で、思想的影響力を持ち続けたのが三民主義、研究会系、胡適派、無政府主義、マルクス主義の五つであつた。三民主義はその後孫文によつて国共合作へと急転回し、また藤介石の四・一七クーデター以後は軍閥的性格のものへと変質していくので、ここでは一応考察の対象から除外する。残る四つの思想潮流であるが、その間にはマルクス主義を中心として烈しい論戦が展開されるのである。この論戦は、各々の思想が前述した中心テーマに対して自らの有効性を競い合う壮烈な戦いであつた。それは観点を変えれば、中国のナショナリズム運動の指導権をめぐる戦いでもあつた。いかなる道をとどり、いかなる方法によつて救国の課題を解決し、いかなる社会を創造するか、この問題をめぐつて各々の思想は死力をつくして論争するのである。そしてその結果は、マルクス主義が最後の勝利者となることであつた。このことは救国と中国社会の改造を課題とする中国の民族運動が、自らの指導思想としてマルクス主義を選択したということであつた。後述するが、この勝利したマルクス主義は決して人間的內容が豊かな、魅力あふれる思想ではなかつた。むしろ人間的思想というよりは、独善的な歴史図式と言つた方がふさわしい内容のものであつた。しかし、そのマルクス主義が勝利したのである。思想論争の歸趨を決定したのは、前述した孫文の「次植民地」という中国の現状に対する厳しい認識である。この厳しい現実と対決する思想の厳しさと戦闘性こそが問われたのである。中国民族運動がマルクス主義を選択しなければならなかつた、ということとは、やはり近代世界システムの大きな規定性の中にあつた。

マルクス主義と胡適との間で行われたのが、有名な「問題と主義」論争である。この論争は題の如く「問題と主義」との関係をめぐつて争われているが、中心テーマは、中国において現実的、漸進的な社会改革は可能か、という問題であつた。胡適の発言の基盤にあるのは、プラグマティズムの科学観である。プラグマチズムでは科学法則を次

のようなものと考えてる。「(一)科学法則は人間が作ったものである。(二)それは仮定である。それが事実を満足に解釈できるかどうかによって、それが適用できるかどうかを決める。(三)永遠不変の真理は存在しない」。このような科学観に立脚する発言であるから、胡適の中国社会改革についての提言は、当然具体的で、現実的な結果を重視するものである。胡適は自らの提言を「多く問題を研究し、少く主義を語る」という言葉で要約したが、言わんとする所は、中国の改革においては、人力車夫の生活問題から大統領の権限問題まで、売春、売官、女性解放などの現実問題の具体的なニュアンスの方が強く、マルクス主義運動に反対する目的でなされたように受取られたが、胡適の真意は「主義」とらわれる危険性を警告することにあった。現実的な問題を具体的に解決するためになされた主張が「主義」になると、現実性と具体性とを失って抽象的な「名詞」となる。そのような「主義」の持つ危険性を胡適は指摘したのである。それは絶対的真理の存在を認めず、常に法則は現実の有効性によって自らを証明しなければならぬとするプラグマチズムの立場からする当然の歸結であった。このような胡適の主張は、マルクス主義運動に反対し、中国の旧体制を温存しようという「悪意」に満ちたものでは決してない。彼も中国社会の改革の必要性を認め、そのために積極的に「奮闘」することを青年に呼びかけている。彼は「新しい村運動」を「独善的個人主義」と批判し、社会の中でその一歩／＼の改革を実現するために奮闘する「非個人主義的新生活」を提唱する。彼の考える「非個人主義的新生活」は、具体的には貧民地区で人々の生活改善のために働くイギリスで起ったセツルメント運動のようなものである。胡適の考える社会改革は、彼自身が「少しづつの改造、一歩一歩の改造」と言うように、確実に成果がある現実的で、具体的な社会改革を少しづつ積み重ねていくことであった。

このような胡適の意見に対してマルクス主義陣営から厳しい批判が行われる。その代表的なものは、李大釗のもの

である。李大釗の胡適への反論の要点は、主義の必要性と根本的改革の必要性を主張したことにある。李大釗は社会問題を解決するためには、社会の多数の人間の共同の運動によらねばならない、そして一つの社会問題を社会の多数の人間の共通の問題とするためには、ともにそこへ向える共通の理想、主義が必要であると言う。従って彼は「我々の社会運動は一面ではもとより実際の問題を研究しなければならないが、他面では理想主義を宣伝しなければならない」と、胡適のように問題と主義を分離することに反対する。もう一つの反論は「想う一つの根本的解決がなければならず、そうしてこそ一つ一つの具体的問題を解決する希望が持てるのである」という言葉が示す「根本的解決」の主張である。李大釗が言う「根本的解決」とは「経済問題の解決」であるが、この「経済問題の解決」があつて初めて政治問題、法律問題、労働者問題、婦人問題などがすべて解決すると李は主張するのである。彼の念頭にあるのが、ボルシェヴィキ革命であることは言うまでもない。彼はマルクス「主義」による「政治運動」によって社会問題の「根本的解決」をするボルシェヴィキ型革命を考えているのである。このような立場からの胡適批判であつた。

胡適と李大釗の主張を比較してみると、胡適のそれは着実で具体的であるが微温的、漸進的である。それに比して李大釗のそれには、大衆的政治運動によつて中国社会の根源的改革を行わねばならぬとする意欲と情熱にあふれ、また壮大な変革へのイメージがある。はたして李大釗が言うように「経済問題の解決」が、社会問題の「根本的解決」になるかどうかは問題である。しかし、少くとも彼はそのことを深く信じ、その信念に鼓舞されている。マルクス主義のプラグマチズムに対する優位は、まさにこの点にあつた。マルクス主義の提示する社会問題解決の方法が、はたして自らの主張するような結果を生むかどうかは、「実証」されていない。李大釗がボルシェヴィキ革命が「実証」したと信じただけである。しかし、マルクス主義の提言は、人々に幻想であれ「希望」をあたえ、人々を鼓舞する。マルクス主義にはそのような思想としての「力」があつた。孫文の言う「次植民地」で希望も、展望も持てずに、苦

悩の中に呻吟している人々にとって必要であったのは、この「希望」であった。近代世界システムの論理は、周辺国としての中国を収奪の対象として亡国の瀬戸際まで追いつめた。そして先進資本主義国の傀儡と化した支配階級は、無能と腐敗の中で民衆抑圧に血道をあげるばかりであった。孫文の言う「次植民地」中国とは、この近代世界システムの矛盾が最も凝縮された場所の一つであった。凝縮された矛盾の中に生きる人々の中には、怒りのパトスが蓄積する。奪われた生活、奪われた人間性、理不盡な抑圧と言語を絶する収奪、そのような世界存在のすべてに対して烈しい怒りと反逆の情念が蓄積していく。このような精神にとつては、胡適の論理はあまりに微温的であり、不徹底であった。それに対して李大釗のそれは、まさしく怒りと反逆の情念をそのままに表現した、現世界の全的否定とその根源的変革を主張する論理であった。李大釗が勝利し、胡適が敗北するというのは、「次植民地」中国という場での論争としては、このような意味で必然の結果であった。

しかし、だからと言って胡適の主張が全く意味を持たなかったと言うのではない。胡適は「主義」の持つ抽象性に欺かれるのは人類の「愚昧性」だとして、次のように言う。「愚昧に気がつかなかつたので、人は容易に幾つかの抽象名詞に欺むかれて水火の中へ赴き、牛馬となり、魚肉となつたのである。歴史上での多くの奸雄政客は、人類がこの馬鹿な性質を持っているのを知っていたので、度々聞こえのよい抽象名詞を用いて大多数の人民を欺き、彼等から権利を奪いさり、彼等を犠牲としたのである。」¹³この言葉は、まさにその後の中国マルクス主義運動への予言であるかの如くにも読める。胡適には世界システムにおける中国の位置という問題への認識と自覚が欠如しており、そのことは論争において致命的であったが、しかし、彼の発言の中には、多くの意味はある提言が含まれていた。しかし、マルクス主義の例は、胡適の発言の中に含まれている積極的な面を吸収するよりは、それを否定することに急であった。胡適は「ブルジョア分子」という類の言葉で断罪されることによつて終る。そして胡適自身もその後は、中国改革の

ために発言するよりは、中国古典研究に沈潜することになる。この論争において見られるマルクス主義の自己完結性と非寛容は、その後の論争の性格を既に暗示するものであった。

研究会系の張東蓀との間にくりひろげられた「ギルド社会主義」をめぐる論争も、基本的には胡適との間のそれと同じ性質のものである。今度は「社会主義的改良」が主題となっているが、根底にあるのは中国社会の漸進的改良が革命かという問題であつた。張東蓀の主張はラッセル理論が影響下になされているが、次の四点に要約できる。最も基本となるのは、実業開発の主張である。彼はラッセルの「中国は実業を開発する以外に自立の道はない」という言葉に深く共感し、大多数の人間に「人間の生活」を未だかつて経験させたこともない、「貧乏病」に犯された中国を救う道は唯一つ。「即ち富力を増加することである。そして富力を増加することは、即ち実業を開発することである」と主張するのである。¹⁴そして現在の情勢下では実業開発の最良の方法は、資本主義であるというのが、彼の第二の主張である。彼は「実業開発の方法で資本主義の速さに及ぶものはない」と言う。外国資本が大々的に侵入してくるといふ情勢下で、中国は外国資本の空隙をぬいつつ実業を開発し、民族の抵抗力を養わねばならないが、各国の社会党が世界資本主義を転覆させることが望めぬ現情勢では、資本主義が最良の策だと言うのである。¹⁵この第三の主張には、競争の勝利者としての資本主義の実業開発への有効性を認めるといふ主張と、世界資本主義の趨勢から、それが不可抗的な「自然の趨勢」だとする二つの側面を含んでいる。¹⁶しかし、彼は資本主義を理想とするわけではない。資本主義は彼によれば第二種の「自由と競争の文明」であり、それは階級間懸隔、民族間の戦争をもたらす。それは「互助と協同の文明」たる第三種の文明、つまり「社会主義と世界主義の文明」に移行しなければならないのである。¹⁷しかし、社会主義への移行は今日の情勢では不可能である。従つて資本主義の中で社会主義の精神を貫徹させる協同組合運動を実行せねばならないと主張する。これが第四の主張である。その論理は次のようなものである。

実業の振興は資本主義には限らないが、しかし、資本主義の方法によらねば、現在の経済制度の下では生存競争に生残れない。現在の経済制度が転覆できないのであれば、転覆した所で民家の生活には利益はない。だからただ協同組合が実行できるだけである。思うに協同組合は、資本主義の方法で社会主義の精神を貫徹するものである。¹⁸⁾世界資本主義を転覆する可能性はない、とする情勢観であるから、当然中国でボルシェヴィキ型の急激な革命に彼は強硬に反対する。彼は資本主義国列強の世界支配という国際的条件においても、プロレタリアートの未成熟という国内的条件においても、中国において「労働革命」は不可能である、と主張する。もし無理にそれを実行すれば、それは「二七労働革命」にしかならないであろう。そしてその結果は「仮りに二七労働革命が起れば、すでにある多くの内乱の上に、さらに一つの内乱をつけ加えるに過ぎない」と言うのである。¹⁹⁾

張東蓀の「労働革命」反対の根拠は二つある。一つは前述したように世界的に資本主義体制であり、世界的な「労働革命」の情勢にはなく、各国社会党にもそれを実行する力量はない、とする判断である。もう一つは彼の社会主義観である。彼はマルクス主義を含めて社会主義を完成された学説とは認めない。これから研究を重ねてより完全なものに仕上げていく必要があると彼は考えている。彼が考えているのは、ボルシェヴィキ型の急激な革命による大変革ではなく、「平和的、漸進的²⁰⁾」な社会改良である。このような立場から彼は「ギルド社会主義」を「人智の進歩」にともなうて発見された「比較的最も円満な社会主義」である、とするのである。²¹⁾張東蓀の「労働革命」反対は、慎重な情勢判断と冷静な社会主義への態度に基いていると言うことができる。彼は世界全体の変化と中国の変化は密接に関連しており、中国独自の飛躍的变化は不可能だと判断している。この判断は近代世界への正確な洞察であり、決して誤っているとは思えない。そして社会主義を未完成な学説として、時代と人智の進歩にともなうてより成熟させたものにするという態度も、信仰的ではなく科学的である。「ギルド社会主義」という選択が正しかったかどうかとい

う問題は別にしても、張東蓀の主張の基礎にあったものがこのようなものであったことは見ておく必要がある。しかし、このような態度から出てくる現実的主張は、非常に漸進的で、待機的ですらある社会改良であった。今日の救済を待望する「次植民地」中国の大衆にとっては、あまりにも微温的すぎた。解放と救済は遠い将来にもちこされたのである。マルクス主義者の批判は、まさにこの点に集中する。この批判は痛烈ではあったが、いささか性急であった。批判は張東蓀にあった中国と世界の現実と情勢に対する判断を捨象して、一気に観念的歴史図式の世界に舞い上るのである。

マルクス主義陣営の批判は、まず第一に資本主義による実業開発という方法を否定することにある。実業開発の方法は、資本主義ではなく社会主義でなくてはならない、というのがマルクス主義者の主張である。その根拠を李大釗は「中国人民は世界経済上の地位において、すでに労働運動が日一日と盛んになっていく潮流の中に立っている」のであるから、資本主義を擁護しようと思っても、理論上でも実際上でも不可能だと言う。許新凱は、中国の病を治すのは、中国独特の方法があり、英国の方法はそのまま適用できない。中国でのスローガンは「政治力を持って経済力を創りだす。経済力を持ってすぐに共産主義に到達する」²³であると言う。プロ独権力の樹立とそれによる工業化政策の実施という順序で考えているのである。また周仏海は資本主義をいったん形成すれば、それを打倒するには長い時間と大きな犠牲を必要とする。従って「我々は資本主義制度が未だ堅固な基礎を持つ前に、社会主義を實行しなければならぬ」と言う²⁴。このようなマルクス主義者の批判を見ていくと、張東蓀が提出した中国で「労農革命」が不可能であるとする国内、国際の現実条件が殆んど真面目に考えられていないことに注目させられる。この論争が行われた一九二〇年から二一年にかけては、もう完全に世界革命の情勢は退潮に転じているが、（一九一九年ドイツ革命は敗北し、翌一九二〇年にはハンガリー革命も失敗している）、そのような世界情勢の評価も全く考慮されていない。

現在の国際的、国内的諸条件の中で、中国の労農革命は可能か、という肝腎の問題は真剣に論じられることもなく、ただ社会主義の必然性やその正しさが一方的に強調されているのである。この意味でマルクス主義は張東蓀の主張を論破してはいない。しかし、非常に観念的な原則論で、それを否定しさせることには成功したのである。

マルクス主義からの批判の第二点は、資本主義の漸進的改良というギルド社会主義の理論に向けられている。この問題における論争においてマルクス主義は張東蓀理論に決定的に勝利するのである。漸進的な改良という何時目的が成就されるかも解らない悠長な主張に対して、より危機意識にあふれて今日の為すべき課題を提示しえたからである。漸進的改良主義に対するマルクス主義の批判は、辛辣をさわめる。英国においても人口の六分の一強しか占めない人間が、資本主義を社会主義に改良しようとしても空想たることを免がれ難いが、ましてや人口四億人、工業労働者百萬人にも満たず、労働組合も萌芽状態にある中国で、それを実行しようとしても、「世界にこれ以上の偉大な空想、夢幻はないであろう」と言うわけである。²⁵この批判は正確であろう。確かに中国はそんな悠長に事を構えている余裕はない。マルクス主義の側の次のような危機意識は、まさに「次植民地」中国に生きる人々の気持を代弁するものであった。「軍閥の収奪、外国資本家の侵略、もし急いで改造しなければ、恐らく中国は外国資本の共同強奪政権の下にいることになるであろう。その時に革命を考えても、天に登るよりも難しいのである。」²⁶確かに中国の危機はそこまで切迫している。この中国の危機に対してマルクス主義は、明確に今日の対処方針を提示する。陳独秀は言う。「中国の労働（農工）団体は資本家と資本主義に反抗するために戦うが、これは中国を保全するために戦うことである。ただ労働団体のみが中国独立の目的を達成することができる。」陳独秀が言わんとすることは、中国の資本主義は外国の買弁であるから、それに依拠しても決して独立を達成することはできない。ただ「労働団体」のみが、独立を達成する力を持つということである。²⁷この方針は明確であり、この方針の下で今日為すべきことも明らかである。この陳

独秀の発言には、中国には反抗すべき主体としての労働者がどれ程存在するか、反抗すべき対象である資本家と資本主義かどれ程成熟しているか、という根本的問題が残されている。しかし、人々に行動の指針を示し、明日の希望を提示するという力は持っている。マルクス主義自体としては前述したように決して思想的に完成されてもいないし、成熟もしていない。むしろ観念的で図式的ですらある。しかし、それが勝利しえたのはそれが時代の危機意識を共有し、現在の行動方針を提起しえたからであった。

有名なアナボル論争は一九二〇年九月、陳独秀の論文「談政治」の発表をきっかけにして始まり、翌一九二一年盛んに行われるが、一九二三年になるとアナキズムは殆んど勢力を失っている。論争の主要な論点は、絶対的自由、権力、プロ独、生産と分配、組織と紀律という五つの問題である。これらの問題は大部分が人類のあるべき社会についての原理的な問題であるから、ここでは中国社会の改造に関するものに問題を限定して考察を進めていきたい。無政府主義の最も基礎にあるのは、個人の絶対的自由の主張である。従ってあるべき社会像は、「各自治単位の平等な契約による大連合」として描かれる。個人が自由意思により形成した自治社会が、相互に契約を結んで世界的大連合を形成するのである。そこでは当然個人を抑圧する強権は存在せず、個人に服従を強制する法律もない。このような個人の自由意思による結合社会を目指すものであるから、そこに到達する過程においても個人の自由意思が尊重されねばならない。社会改革は個人の自覚によらねばならないのである。「比較的良好な革命運動の方法は、大衆を呼びさまし、起ち立たせ、直接に革命を行わせることである」ということであるが、そのために教育、宣伝、煽動等のことが行われねばならない。要人の暗殺も大衆を覚醒させる手段として行われる。暗殺は理想主義的なアナキズムの主張にふさわしくない感もあるが、それはあくまでも非合理的な社会を改革し、大衆を覚醒させる手段である。アナキズムの終極の理想とする社会とマルクス主義のそれとは、何ら異なることはないが、しかし、それを実現する手段、方法

において両者は衝突するのである。具体的には中央集権的党の組織とプロレタリア独裁である。アナキズムは「自由連合こそは、革命の最良の武器である」と主張し、共産党の党組織にもプロ独にも反対するが、マルクス主義の側は、政権奪取のための武装と指導部としての党組織の必要性、政権獲得後の反革命の弾圧のためのプロ独の必要性を主張する。アナキズムの主張は、人間性の善とその変化への可能性を信じた理想主義的性格のものであるから、この現実社会の中では、マルクス主義の次のような批判の前には、対抗すべき論理を失うのである。

政権がなければ産業の集中ができず、産業の社会化ができない。言葉をかえて言えば、経済制度を改造できない。政権がなければ革命を守れず、反革命を防止できない。打倒した階級が復興すれば、革命は無に歸するであろう。だから私は現在の世界では無政府主義は実行できないと考える。現在の世界は明かに二つの対抗する階級が存在しているから、有産階級の独裁を打倒し、無産階級の独裁で反動を鎮圧しなければならぬ。ロシアがその明証である。だから私は中国の将来の改造には、社会主義の原理と方法が完全に適用できると考える。³²

次いで蔡和森は「四種の利器」として共産党、労働者の組織、ソビエトとの国際連帯、プロ独の四つをあげている。彼はマルクス主義とロシア革命から中国社会改造のための具体的方法を得ているのである。それは暴力的世界に対抗し、それを打倒し、変革するための「対抗暴力」形成の方法論である。この方針は具体的であり、明確である。このマルクス主義の方針に比すれば、アナキズムの主張はいかにも迂遠であり、観念的である。ここに到ってアナキズムはマルクス主義に決定的に敗北するのである。

以上の論争を通してマルクス主義は対立する思想を打倒し、中国社会の改造をめざす運動の思想的主導権を握ることと成功する。しかし、冷静にこれらの論争をふり返ってみると、マルクス主義が提起された問題をすべて解決したから勝利したのではなかったことも明かである。マルクス主義の勝利の原因は、中国の現実に対する烈しい危機意識

に基く熱烈な現実変革の情熱的主張にあった。そしてそれは具体的な変革の方法と今日の課題を提起した。他の思想には、マルクス主義のような切迫した危機意識も、大きな変革への方法論も、未来の「救済」への展望もなかった。ここにマルクス主義の勝利の原因があった。就中、マルクス主義が階級闘争とプロレタリア独裁による、今日の変革のプログラムを提出しえたことは決定的であつた。それは抑圧された人々に突破口を示し、奮闘を促すものであつたからである。

ここに近代世界の中国民族運動に対する決定的な規底性がある。中国民族は長い苦闘と試行錯誤の末に、このシSTEMの本質たる「暴力的性格」を発見した。このことの自覚は前述したように晩年の孫文によって形成された。そして孫文は「次植民地」という帝国主義国の幾重もの抑圧下にある中国ナショナリズムの根本課題は、帝国主義の「暴力」に対抗しうる「対抗暴力」の形成にあることを深く自覚したのであつた。このような中国ナショナリズムの課題に応えうる思想は、マルクス主義以外には存在しなかつた。論争の相手となつた思想には、どれも「暴力」の形成という問題が決定的に欠落していたからである。マルクス主義のみが、非法と収奪の暴力的世界に対して、「正義」の暴力の組織と人間解放の闘いというテーゼ提出できた。論争は行われたが、実はマルクス主義以外には選択肢はなかつたと言ってもよい。近代世界の暴力的性格は、中国民族運動がマルクス主義を選択することを、殆んど決定づけていたのである。

このようにして選択されたマルクス主義ではあつたが、その思想内容は単なる未来の「救済」を約束する「信念」と言うにふさわしいものにしからずなかつた。次のような言葉がそれをよくしめしている。

社会主義は現代社会のすべての悪弊を救う万能薬である。恐らく社会主義に反対する人も、心の中では承認している事である。³⁴

ギルド社会主義、無政府主義はやはり一種の不完全な主義である。ただ共産主義だけが、手段を持ち、目的を持ち、一步一步と着実に前進できる、可能で、完全な主義である。⁸⁵

ここに吐露されているのは、マルクス主義という理論に対する「信念」である。が問題はその理論を具体的に中国でどう実現するか、という事であった。はたして中国で可能かどうか、中国にその条件は存在するのか。中国革命の具体的戦略と戦術をどう構築していくか。そのような肝腎な問題は、存在すら意識されていない。このような観念的で幼稚な思想が現実変革という大事業を担えるはずがない。それがコミンテルンの指導を受け、幾多の挫折を経験しなければならぬというのは、また必然のことであった。

中国のマルクス主義運動は失敗をくり返しながら、次第に中国ナショナリズム運動の大黒柱へと成長していく。特に抗日戦争期になると中国共産党はまぎれもなく中国民族を代表する党へと成長する。しかし、マルクス主義と中国民族運動との間には、根本的に相容れぬ多くの矛盾が存在していた。マルクス主義は西欧的工業社会の社会矛盾を解決することを問題意識として生成してきたものであり、工業社会と工業生産力の増大を前提としていた。しかし、中国は農民が九割以上を占める農業社会であり、その生産力はマルクス主義が前提とする生産力とは雲泥の差があった。またマルクス主義運動が前提とするプロレタリアートは、中国では圧倒的な少数階級であり、社会の変革を担うだけの力量はなかった。マルクス主義の土壌となった経済学、市民革命の思想、共産主義思想といったものも、もとより中国には存在しなかった。このような事情を虚心に考えれば、実は中国民族主義運動がマルクス主義運動によって代表されるとは、非常に奇異な現象であったのである。

しかし、この奇異な現象の中に、中国が近代世界で負わねばならなかった非劇が貫徹していることを見なければな

らないであろう。中国は西欧の侵略をはね返し、国家的独立という民族的課題を達成するためには、西欧資本主義国に倣い、まず自ら「西欧化」することによって「富強」にならねばならぬという一種の「矛盾」を近代世界システムから強いられていたからである。洋務運動から現在の現代化路線まで、すべてこの「矛盾」を引受けるものであった。共産主義運動という「革命運動」として決してその例外ではなかったのである。西欧の反体制思想ではあるとは言え、やはり西欧の思想と運動に学び、それを模範としなければならなかった。近代西欧はここにおいてまで、厳しく中国を呪縛している。中国民族が民族的アイデンティティーを深く自覚する時、何らかの形で衝突と軋轢は避けられないものであった。中国の非劇の背後にあるものは、まさにこの近代世界システムの中国に対する厳しい規定性なのである。

註

二 西欧的近代化の追求

- (1) I、ウォーラーズテイン「近代世界システムI」
川北稔訳 岩波現代選書 一九五頁
- (2) 前同 一九五頁
- (3) 前同 一一〇頁
- (4) 鄭観応「盛世危言」——道器
以下、洋務運動の資料は、中国近代資料叢刊「戊戌变法」上海人民出版社による。邦訳西順蔵編「原典中国近現代思想史」第二冊、岩波書店の訳文があるものは参照した。 四四頁
- (5) 前同
- (6) 王韜、攷園文録外篇「变法上」 一二〇頁
- (7) 薛福成「筹洋芻議」、「变法」 一六〇頁
- (8) 王韜、前掲「变法中」 一三二頁

- (9) 馮桂芬「校邠廬抗議」〔製洋器議〕 三〇〇頁
- (10) 鈴木智夫「洋務運動の研究」汲古書店（一九九二年） 四八頁
- (11) 前同 一四一頁
- (12) 李時岳胡濱著「从閉关到开放」 人民出版社（一九八八年）——三二頁より再引用
- (13) 鈴木前掲書 第二編第二章 三二頁
- (14) (9)に同じ 三二頁
- (15) 王韜前掲書「变法下」 一三六頁
- (16) 中村義「辛亥革命史研究」未來社（一九七九年） 五頁
- (17) (4)に同じ 四〇頁
- (18) 康有為「上清帝第一書」戊戌变法(一) 一二七頁
- (19) 「上清帝第六書」 二〇〇頁
- (20) 「進呈日本明治變政考序」戊戌变法(三) 三頁
- (21) 「上清帝第六書」戊戌变法(二) 一九六頁
- (22) (18)に同じ 邦訳 三三頁
- (23) 前同 一四一頁
- 三 啓蒙思想による「革命」
- (1) 梁啓超「中国積弱溯源論」梁啓超選集上海人民出版社（一九八四年） 一四〇頁
- (2) 「新民說」 前同 二〇七頁
- (3) 前同 二二九頁
- (4) 「新大陸遊記」 二四〇頁
- (5) 鄭容「革命軍」 四三三頁
- (6) 以下革命派の文章は「中国近代思想史参考資料簡編」三联書店（一九五七年）による。 六三〇頁
- (7) 邦訳は前掲思想史第三冊による。 七二二頁
- (8) 陳天草「猛回頭」 三五六頁
- 楊毓麟「新湖南」邦訳

- (9) 孫文「三民主義与中国前途」 八二五頁
 (10) 寺広映雄「革命瓜分論の形成をめぐる」小野川秀美編「辛亥革命の研究」筑摩書房(昭五三年) 一〇三頁
 (11) 前同 九六頁
 (12) 民報「駁革命可以召瓜分説」 八七九頁
 (13) 〃「駁革命可以生内乱説」 八九五頁
 (14) (12)に同じ 八七四頁
 (15) 孫文「中国問題的真解決」 八〇三頁
 (16) 俞辛焯「孫文の革命運動と日本」六興出版社(一九八九年) 二五頁
 (17) 久保田文次「辛亥革命と帝國主義」講座「中国近現代史」第三卷東大出版会(一九七八年)に詳しい。 四三頁
 (18) 以上の叙述は(16)第六章による。
 (19) 孫文「中国存亡問題」 八八頁
 (20) 前同 六三頁
 (21) 前同 九四頁
 (22) 前同
- 四 孫文における植民地解放論の形成
- (1) 孫文「三民主義」全集九卷 二二四頁
 以下孫中山全集中華書局(一九八六年)による邦訳山口一郎等編「孫文選集三卷」社会思想社(一九八九年)の訳文を参照した。
- (2) 前同 一九三頁
 (3) 前同 一九三頁
 (4) 前同 一九四頁
 (5) 孫文「建国方略」 第六卷 一九七頁以下 二一四頁
 (6) 前同
 (7) 孫文「在広州大本営対国民党員の演説」 第八卷 四三七頁
 (8) 前同 四三〇頁
 (9) 孫文「在上海寰球中国学生会の演説」 第五卷 一四頁

(9)	〃	「非個人主義的新生活」	三三〇—三三二頁	
(8)	〃		三三三頁	
(7)		胡適「多研究些問題、少談些主義」	二九二頁	
(6)		胡適「實驗主義」中国現代思想資料簡編第一卷浙江人民出版社（一九八二年）	二七七頁	
(5)		傅彬然「五四前後」五四運動回想録（下）中国社会科学出版社（一九七九）	七四二—七五三頁	
(4)	〃		一〇二—一〇三頁	
(3)	〃		九七頁	
(2)		前同		
(1)		陳漢楚編著「社会主義在中国的傳播和实践」中国青年出版社（一九八四年）	九六頁	
		五 マルクス主義の選択		
(26)		池田誠「孫文と中国革命」法律文化社（一九八三）	一五五頁	
(25)		(23)に同じ	二八三頁	
(24)		孫文「对神戸商業會議所等団体的演説」	四〇九頁	
(23)		横山宏章「孫中山の革命と政治指導」研文出版（一九八三年）	二七—七八頁	
(22)		(12)に同じ	七五頁	
(21)	〃		二五三頁	
(20)	〃		三八一頁	
(19)	〃		二五五頁	
(18)	〃		二九三頁	
(17)	〃		二八二頁	
(16)	〃		二二六頁	
(15)	〃		二二六頁	
(14)		(1)に同じ	二二三—二四頁	
(12)		中国国民党第一次全国代表大会宣言	七五頁	邦訳三卷
(11)		(1)に同じ	二〇—二二頁	邦訳二卷
(10)		孫文「五四運動について」	三八〇頁	邦訳二卷

- (10) 李大釗「再論問題与主義」 一八九頁
- (11) 〃 一九四頁
- (12) 〃
- (13) 胡適「三論問題与主義」 三〇八頁
- (14) 張東蓀「由內地旅行而得之又一教訓」 六一六頁
- (15) 〃 「談社會主義」 中國現代思想史資料選輯上冊 八三頁
- (16) 〃 「現在与将来」 前掲資料簡編第一卷 六二七頁
- (17) (14)に同じ 六一一六二頁
- (18) (15)に同じ 八九頁
- (19) (16)に同じ 六二二三頁
- (20) 〃 六二七頁
- (21) 〃 「一個申說」 六三二頁
- (22) 李大釗「中國社會主義与世界資本主義」 前掲選集 三五六頁
- (23) 許新凱「再論共產主義与基爾特社會主義」 「社會主義討論集」 新青年社（一九三二） 龍溪書舍復刻版 四九四一五頁
- (24) 周仙海「實行社會主義与發展實業」 前同 二五七頁
- (25) 施存統「讀新凱先生「共產主義与基爾特社會主義」」 前同 四四六一七頁
- (26) 許新凱「今日中國社會究竟怎樣的改造」 〃 四六五頁
- (27) 陳独秀「復東蓀先生底信」 前同 七〇頁
- (28) 胡慶雲、高軍「無政府主義在中國」 高軍等編「無政府主義在中國」 湖南人民出版社（一九八四） 前同 四二五—四四四頁
- (29) 区声白「答陳独秀先生的疑問」 〃 四四九—四五二頁
- (30) 血鐘「革命運動」 〃 四三四—四五頁
- (31) (29)に同じ
- (32) 蔡和森「關於中國革命問題致毛沢東同志的兩封信（一） 前掲簡編」 七二四頁
- (33) 前同 七二四—七二六頁
- (34) 同仙海 (24)に同じ 二五二頁
- (35) 許新凱 (26)に同じ 四七二頁